

PISA型学力を身につけるために

－言語力検定の活用方法を考える－

開倫塾

塾長 林明夫

1. はじめに

15歳時の国際標準の学力調査であるPISA型学力を身につけるにはどうしたらよいか。

このテーマは、フィンランド文部省とOECDの共催でヘルシンキ大学で開かれた3日間の国際会議に数年前に参加して以来、ずっと頭から離れることがなかった。

そのような中、今秋、財団法人文字・活字文化推進機構がPISA型読解能力を育成するために「言語力検定」を実施すると聞き及び、これほど有難いことはないと感じた。

初めての試みであるため、開倫塾では、「言語力検定」の主催団体である文字・活字文化推進機構の先生方から何回かお話を伺い、実施を検討。本年度は、手始めに希望する先生方と塾生、500名弱が受験をさせて頂くこととなった。

来年度からは、本年度の経験を踏まえ、全ての先生、全塾生を中心に保護者や地域社会にも呼びかけた全塾挙げての取り組みにしたいと考える。

2. PISA型学力を身につけるために

PISA型の学力を身につけるためには、PISAの基底となる学力観である「キー・コンピテンシーズ(鍵になるような基本的能力)」についての以下のような理解が欠かせない。

(1)「キー・コンピテンシーズ」の内容は3つある。

- ①知識・情報・技術を相互作用的に用いる能力(知識基盤型社会に対応するための能力)
- ②多様な集団で交流する能力(グローバル化社会に対応するための能力)
- ③自律的に活動する能力(課題山積の社会に対応するための能力)

(2)「キー・コンピテンシーズ」を身につける前提となる能力が3つある。

- ① Learning To Learn(学び方を学ぶ)能力
- ②読書により思慮深さを身につける能力
- ③新聞を読み考え「批判的思考能力」を身につける能力

(3)「人生の成功」と「正常に機能する社会づくり」がこの「キー・コンピテンシーズ」の目的で、学校を卒業した後も生涯にわたって身につけることが求められる。

(4)以上、PISA 型学力の背後にある「キー・コンピテンシーズ」について基本的な考えを十分理解した上で、その具体的な展開方法を考えれば、PISA 型の読解能力は身につけ、「言語力検定」のよい対策となる。

3. 「言語力検定」の活用方法とは

(1)年齢相応の読書を十分にした人は PISA 型学力が高く、そうでない人は低いと言われる。

読書により求められる能力は思慮深さ、自省心、省察能力であるから、それに値する本の選択、図書館の活用方法などの指導が欠かせない。

これぞという本は 6 回読み込むこと、心に響いた文章は「書き抜き読書ノート」に書き写すこともお勧めしたい。

(2)小学生は 20 分、中学生は 40 分、高校生は 60 分以上、新聞を毎日読む習慣を身につける指導も不可欠だ。社会で生起している問題を広く知るために、できれば一面からなめるように読む指導が望ましい。新聞を読んで求められる能力は、自分で考える力、批判的思考能力である。

新聞を読み、関心のある記事を切り抜いてノートに貼り付け、コメントを書く指導は有用である。

4. おわりに

PISA 調査は、高校卒業程度、大学卒業程度と少しずつ種類が増えると聞き及ぶ。3 年ごとの調査の結果が発表されるごとに一喜一憂することのないように、教育の成果は一人ひとりの人生を決定すると同時に国の運命も決するものなので、国を挙げての国家戦略としての取り組みを期待したい。

－ 2009 年 11 月 3 日ヨハネスブルクにて記す－